チリ・パタゴニア1968-69 ――ある学生探検の記録 第15回

さらば チリ・パタゴニア

安成哲三 やすなり てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学，地球環境学)

イラスト＝安成 晶

ここの連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．幸い，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，昨年4月号より15回に分割して掲載していただくことになり，今回は最終回となった．これまで，チリ・パタゴニア探検の発案から実現にいたる経緯，現地での氷河地域の調査，モーターボート「サン・ハビエル号」による人跡未踏のチリ・パタゴニア諸島部の小航海の報告などを行い，前回は，ウェリントン島の基地プエルト・エデンを中心に「海の放浪民」として生きる先住民族アラカルーフ族について報告した．

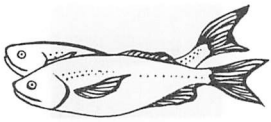
今回は，文明から隔絶したプエルト・エデン「村」に生きる人たちの暮らしを紹介して，私の探検報告の終わりとしたい．(タイトル横のイラストは，カラファテというパタゴニア特有のとげのある灌木で，この実を食べた人はまたパタゴニアに帰ってくるといわれている．残念ながら，私は現地でこの実を食べることができなかった．)

軍艦「セラーノ」号

2月18日．今日は井上治郎(あだ名「ジロー」)と2人でウェリントン島の奥にそびえる例の怪峰のアタックに出発する日だった．全部で6日の予定をとってある．準備していると急に外が騒々しくなった．エデンの入江を見るとかなり大きな軍艦が停泊している．駆逐艦「セラーノ」号だという．「セラーノ」号の下士官や水兵が大挙してこの空軍のポストを見にきた．

プエルト・エデンはチリ最南部の州，マジェラン州に入っている．そのマジェラン州知事が「セラーノ」号に乗ってエデンに新しく建設中の小学校を視察に来た．今日はエデンの人々にとって祝日になる．なるほど外に出るとアラカルーフたちの小屋にもみなチリ国旗がへんぽんとひるがえっている．

やってきた水兵たちと雑談していると，「セラーノ」号の艦長が日本の探検隊に会いたがっているからすぐ来いという．さっそく迎えのランチにとび乗る．井上民二(あだ名「ブンヤ」)と伊藤隆は昨日から湖の調査に出かけて，いない．将校の案内でさっそく艦内へ通される．豪華な将校用サロンで艦長と会う．白髪で60歳位の堂々たる人



物だ．片目の年とった漁師とピスコを飲みながらちょうど何やら話しているところだった．彼はエデンの実力者の1人でエデン村の首長になりたがっているとあとから耳にした．

艦長はいいかげん酒がまわっているらしく，やや赤い顔をしている．昨夜は天気が悪くて一睡もしていないという．マジェラン州知事を乗せているとなると余計に気をつかうことだろう．流暢な英語にこちらはしどろもどろのスペイン語と英語．わが隊員はすっかりスペイン語慣れしてしまい(といっても上手だということを意味するのではない)，たまに英語を話す機会があってもすぐスペイン語がまじってしまう．複数の外国語を，ろくに，しかも同程度にマスターせずにかじっていると，お互いにじゃまし合う効果があるように感じる．

艦長はひとつの大きな情報として「アギラ」号が2月26日に，南極帰りの「アキレス」号が3月末にエデンに立ち寄る，というニュースを知らせてくれた．ぼくたちの帰途は，これらのどちらかに合わせねばならない．

そのうちに，目のくりくりした年の頃7,8歳のかわいらしい男の子が顔を出した．艦長は英語で「アドミラル(海軍大将)の息子さんでねえ，乗りたいとおっしゃるからまあ連れてきたんだが」と半ばしかたなさそうに言った．日本なら公私混同もはなはだしいと厳しく追及されそうだが，さすがのんびりしたものだ．艦長がちょっと用があるからと言って退席した後，その子供の遊び相手をするはめになり，しばしドミノに興じる．なかなかませた子供でタバコを吸おうとするとサッとポケットからマッチを出して火をつけてくれる．

やがてオンセの時間となり，将校たちと食卓について話をする．オンセとはチリ独特の習慣で日本でいえば「おやつ」のようなものだ．チリでは夕食がどこでも8〜9時と遅いので途中お腹がすく．それで夕方の4〜6時ごろパンやクラッカーとお茶かコーヒーで軽く食事する．しかもこのオンセは日本の「おやつ」のように取ったり取らなかったりという不定なものではなく，どんな家にいってもある．むしろチリ人は1日4食と見る方が妥当だ．ところでこのティータイムをなぜオンセ(once)即ち11と呼ぶのか．その起源はチリ人の酒好きをよく表わしている．

オンセは日本の「おやつ」のように八つ時，即ち時刻を意味するのではなく，11文字を意味している．チリには昔から船乗りが多かった．かれらは例外なく酒好きである．ある船で船員たちは昼間からあるきまった時刻になるといつも酒を飲んでいた．しかしそのうち船長が見つけてそれを禁じた．かれらの飲んでいた酒は11文字の単語でaguardienteという焼酎のようなものだった．そこで，船長にそれと悟られないように飲むために，いつも飲んでいた時刻になると「さあ，オンセ(11文字)をとろう」と仲間同士知らせ合って隠れて飲んだ．その時刻が夕方の4〜5時頃で，のちにその時刻のティータイムも「オンセ」と呼ばれるようになった，という話である．

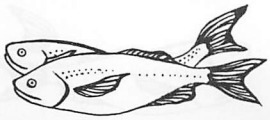
「セラーノ」号を後にする時，甲板でバッタリ，ポストのプラクティカンテ，ファン・パベスに会う．彼は1カ月の休暇でプンタ・アレナスの自宅に帰っていた．今日からまたぼくたちの仲間となる．

彼は日本からの手紙を持ってきていた．ぼくのところには母から週刊朝日「東大入試中止による受験志望変更一覧」と称する号を送ってきた．「東大入試中止……」の記事もさることながら，久しぶりの日本語で引っぱりだこ．もうひとつ，ファンは大きなものをもたらした．隊長がサンチャゴから送ってくれたエンジンのガスケットだ．これで明日からの予定がガラッと変わることになった．

まず2月26日までは，「きょうと」号を再生させてボートによる調査を集中して行う．26日の「アギラ」号にボートその他のほとんどの装備を積みこみ，2人が一緒に帰途につく．残りの隊員は3月中旬頃の定期船「ナバリノ」号で帰途につく．問題は，誰が装備と共に先に帰るか，だ．

誰が先に帰るか——ひとつのパーティ論

2月19日．「きょうと」号のエンジン修理を，寺本巌氏を中心にやる．ボート係のブンヤは湖沼調査からまだ帰ってこない．長い間放置していた



ためシリンダー内部までさびついていた．ガスケットをつけ油でふいて修理完了．室内で手で始動してみたが，良好．朝から夕方までかかった．

夜，ブンヤらも帰ってきたので今後の予定を全員で話し合う．約1週間後にやってくる「アギラ」号に装備を積んでしまわねばならぬことには誰も異存はない．膨大な装備を定期船「ナバリノ」号に積むことはできない．しかも，「ナバリノ」号はプエルト・モントまでしか行かず，荷物の積みおろし，保管，輸送を考えると非常な労力を要する．軍艦だとサンチャゴ近くのヴァルパライソまで運べ，しかも積みおろし，保管は一切海軍がやってくれる．とくに人手のいるボートとエンジンのことを考えると，海軍に頼る以外にないようだ．3月末にチリの南極基地から帰ってくる巡洋艦「アキレス」号も，寺本氏が3月中に帰国せねばならないので考慮に入らない．だいたい1カ月も先の船の予定などあてにはならない．ここは「アスタ・マニャーナ」の国だ．

では，誰が先に「アギラ」号に乗るか．「アギラ」号で帰ることは，予定よりやや早く引き揚げることになる．まだエデン付近でやりたいこと，せねばならぬことがあるいっぽう，エデンを早く離れれば他の地方を旅行する時間が増える．等々，あらゆる思惑が混じり合う．

ぼくたちの隊は，出発前から帰国するまで，何か新たな決定をする場合はかならず，全員が集まって合議した．それも，形のごとく集まって各自の意見を吐くが，最終的に隊長の判断で決めるというのではなく，文字どおりの合議だった．隊長の意見も，ぼくたちの意見も対等であった．いやむしろ，多くの場合，計画の発案者たるぼくたち学生3人の意見の方が重く見られた．ぼくたちの探検隊の性格上，この「全員合議制」はどうしても必要な制度だった．

例えば，登山隊の場合，ある山の頂を踏むという唯一の目的に向かって，全員が総力を挙げる．各隊員の目的も完全に一致しているため，経験豊富な隊長が，ある程度自由に，隊員の行動を采配しても，それが目的に少しでも早く近づくためであるなら，隊員からも不満は出てこない．実際に，目的——登頂すること——を達成できるのは隊員の中の一部の者であっても，全員の協力で達成できたことがむしろ重要視され，全員が満足する．スポーツとは，そういうものである．

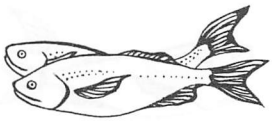
しかし，探検隊，調査隊の場合は，多くは，隊の目的＝各隊員の目的の寄せ集め，にすぎない．もちろん，単一の目的を追いかける探検隊もある．その場合，全員がその目的を「自分の目的」にもしていれば，問題はない．が，中には，下働きばかりさせられて，といった不満を持つ隊員のでてくる可能性がある．

ぼくたちの隊の中でも当初，現地の行動のしやすさ，より実りある成果をねらって，例えば，氷河の調査1本にしぼるべきだという声が，寺本副隊長あたりから出ていた．しかし，これには，ぼくたちも，隊長も反対した．「発案者たる学生3人が私のところに来た時，すでにそれぞれのテーマを決めていた以上，それを尊重せねばならない」と隊長は言い切った．「最終的には，パタゴニアに行きたいというのが全員の一致点だから，調査目的は，いわば二の次でしょう」というのが寺本氏の意見だった．

確かに，すべての虚飾をはぎとれば，(パタゴニアに)行きたいということだけだろう．しかし，行くということを，自分にとってより実りのあるものにするためにはやはり，自分で決めた目的にそって，でなければならなかった．

「全員合議制」は，各自の目的の追求を，質的に平等にするための制度だった．実際には，学生5人が，それぞれの調査計画や行動のチェックを行ない，中島隊長や寺本副隊長はむしろ，調停役としてしか口を出さぬことが多かった．

各テーマをそれぞれ平等に扱うといっても，時間や人数，行動手段に限度のあるひとつのパーティでは，なかなかむつかしいことである．しかし，これをやりおおせなければ，隊員の中に，誰かの心の中に，悔いや不満を残すことになる．もし，全体の日程が，船などの都合で縮小されるなら，それに見合って，誰もが各自の調査計画を，同程度縮小しなければならなかった．もちろん，全員が納得すれば，かなりの変則も認められる．例えば，ジローは，氷河地帯に入るのが大幅に遅れたため，氷河調査終了期日の多少の延期を希望した



ことがあった．ひとつの調査の延長は，他の調査の縮小を意味する．しかし，彼は，延期が彼の調査にとってどうしても必要なことを説いて，他隊員の了解を得ることができた．すんなりとおさまることもあれば，かなりのケンカになることもある．が，どういう場合にしろ，多数決ではなく，全員が納得する線を見つけるのでなければならなかった．逆に，全員が納得しさえすれば，予定外の行動も認められた．たとえば，調査のあい間に行なった山登りなどはその例である．とにかく，もっとも大切なことは，全員がそれぞれ，「やりたいこと，やるべきことは，可能なかぎりやれた」と帰国後言えることである．

今度も，誰か2人が早く，パタゴニアを後にせねばならない．お互いのエゴをぶつけ合い，議論した結果，伊藤とブンヤが，この任務を負うことになった．伊藤は，ひとつの条件として，そのかわり，プエルト・エデンを発つまでの短い間，すべての雑用から離れて，植物のスケッチに専念させてくれと言った．これも，予定外の希望ではあったが，認められた．

翌朝から，彼はせっせと，付近から取ってきた植物を片手に，精密なスケッチを始めた．このスケッチが，帰国後，パタゴニアの植物を研究している学者にとって，貴重な資料になろうとは，誰が予想しただろうか．

プエルト・エデンの人々

3月5日．プラクティカンテのファンが，付近の漁師の家に回診にいくというので，ついていく．今，空軍ポストには1隻のボートもない．海岸においてあるアラカルーフ一家のボートを借りて，漕ぎ出す．

折からくもり空に雨がちらついてくる．しかし，雨の中でボートを漕ぐことも，すっかり慣れてしまった．ここではむしろ，雨の降ってないことの方がふつうではないのだから．

プエルト・エデンは，ひとつの小さな入江をかたちづくっており，空軍のポストはその一番奥にある．付近にはアラカルーフの8家族が住んでいるだけで，ほとんどの漁師たちは，入江とメシエル水道を区切る，半島といくつかの小島に住んでいる．したがって，かれらの家に行くには，入江をボートで渡らねばならない．

図1――プエルト・エデンの入り江に建設中の教会や学校．

2人の漕ぐかいの音が，ギーギーと入江のなかにひびくようで，快い．プエルト・エデンには，アラカルーフと漁師をあわせて，約200人が住んでいる．しかし，ふだんは，どこにそんな人たちがいるのかと思うほど，静かで人の気配がしない．海岸ぞいに点々と家が見えても，なんだかみんな，空家のように感じるくらいだ．時たま見かける煙突の煙にはじめて，人が住んでいるのを確認する．男たちの大部分が漁に出かけているせいもある．

やがて，半島内の小さな入江にはいる．海辺には，森を切り開いて，小学校，教会，診療所，警察の派出所が，並行して建設されている(図1)．さらに，農林省の出張所もできるという．小学校はもうほとんど完成している．ファンは，まだ骨組しかできていない小さな診療所を案内してくれる．「完成すれば，ワイフをプンタ・アレナスから連れてきて，ここに移るんだ」と，うれしそうに説明する．

これらの建物の完成により，プエルト・エデンは，単なる，嵐や潮待ちのための避難港，数十人のアラカルーフと，入植してきた漁師たちの小部落，気象観測を行う空軍ポストが唯一の公的機関であるへき地，という位置から，行政区画の最小単位として，即ち村(チリではDistrictという)として，役割をはたすことになる．しかし，特に，警察と役所ができることにより，プエルト・エデンは，よそ者――国家権力――の支配が強まっていくことだろう．

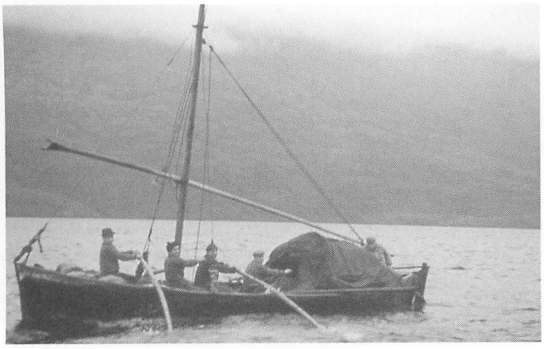


図2——手漕ぎのボートで海を放浪するチリ・パタゴニアの漁師たち.

ファンのあとについて，1軒の漁師の家に入る．14〜15歳にはなるだろう，背ばかり高い少年が患者だ．栄養不良とビタミン不足だとファンは言う．プエルト・エデンの人たちは，アラカルーフ，漁師たちを問わず，貧しく，ふんだんにとれる貝類以外は，ほとんど食べない．特に，新鮮な野菜は食べようにも食べられない．大晦日に訪ねた小島の開拓者は，その意味で，貴重な存在だった．

当然，エデンには栄養不良，ビタミン欠乏症が慢性化している．ファンは，少年の尻にビタミン注射をして，診察を終えた．ちょうどオンセ時で，ストーブのある小さな居間で，お茶をよばれる．家族全部，夫婦と子供4人がそろっている．この一家は，4年前に，チョノス諸島の一小島からやってきた．

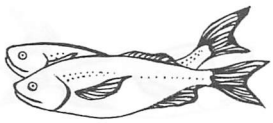
プエルト・エデンの漁師は，ポブラドール(Poblador，移民，植民という意味)と言われている．その名のごとく，北のチロエ島，チョノス諸島，プエルト・モント，あるいは，南のプンタ・アレナス方面から，多くは移り住んだもので，チロエ島人，チョノス諸島人といわれる，やはりモンゴロイド系の，より早く文明化した人たちの血をひく者も多い．かれらは，パタゴニアの島々の間を，小ボートで，時には3〜4カ月から半年も家を離れる漁の生活をしており，アラカルーフと大差のない生活形態をとっている(図2)．ポブラドールの方がやや生活程度がいいというくらいの差である．それ故，アラカルーフの同化は，直接，中央政府の役人の指導によるより，かれらを媒介にする道が開けている．が，かれらの生活はやはり，貧しい．漁場に乏しいからでもなく，かれらがあまり働かないからでもない．

漁労が，個別的な採集経済の域を出ていないということと，そして何よりも，資本主義国一般に見られる搾取構造にその原因はある．少し前までのアラカルーフのように，また2〜3代前までのかれらの祖先のように，カヌーやボートでパタゴニアの海を放浪し，貝をとり，魚をとり，あざらしを追う自給自足的生活なら，それなりの「豊かさ」もあったに違いない．しかし，労働の生活の形態はそのままでも，現在は，定期船が来るたびに，貝や魚を売って換金している以上，その国の経済体制に支配されてしまう．ただ，月に1,2回しか船が来ないということが，かれらの生活を，昔ながらの方法で続けることを可能にしている．

ファンとぼくは次に，ラウル・レヴィカンの家に行く．中に入ると，天井からたくさんの衣類がつるしてあり，それでなくとも暗い室内を，よけい暗くしている．洗たく物は，雨がいつ来るかわからぬこの地では，外で干すわけにはいかないのだ．

ここは，ひとりの老婆が，肝臓を病んでいた．彼女は近く，プンタ・アレナスに入院するという．ラウル・レヴィカンも，太平洋方面を共にボート旅行した時，つねに，変なせきをし，たんをはいていた．プエルト・エデンで多い病気は，結核，チフス，疥癬(皮フ病の一種)だとファンはいう．特に結核は，アラカルーフ，漁師を問わず，蔓延している．日本の都会などとは違い，非常にきれいな空気のもとで生活していながら，なぜ結核が多いかと，シロウト的疑問がわく．しかし，世界の未開あるいは後進と呼ばれる地域で，原住民の間で結核が蔓延しているところは多い．カナダのエスキモー(本多勝一: カナダ・エスキモー，朝日新聞社(1981)参照)，ネパール(岩村昇・岩村史子: ネパール通信，新教出版社(1968)参照)等，報告例も多い．いずれも結核菌に未感染だったのが，ヨーロッパ人と接触して感染し，免疫がないため，あっというまに，次から次へと病気になってしまう．そして，結核菌のうようよする汚染環境になってしまう．パタゴニアの原住民に関しても，その例にもれない．

17,18世紀以降，次々に通りかかるヨーロッパ



の航海者たちと接するうちに，感染し，蔓延していった．一時は1万人もいたというアラカルーフの急激な減少も，結核と，同じようにして拡がった梅毒によるものである．しかし，いったん拡がると，免疫ができて，かかりにくくなるのではないかという疑問もわく．現在にまで蔓延しているのはどうしてだろうか．その説明として，あげられるのは，社会的要因として，貧困からくる栄養不良による，抵抗力の弱いことだ．これは，大したことのないようで，意外と重要な原因である．

プエルト・エデンの人々が，貝ばかり食っているという生活状態から脱しない限り，結核はなくならないだろう．現在では，重症者をプンタ・アレナスに入院させたり，プラクティカンテのはたらきによって早期発見や投薬が期されており，確かに死亡率は減った．が，かれらから結核などの伝染病を根絶させるには，投薬や診療所の建設以前に，かれらを貧困から解放しないかぎり，根本的解決にはならない．

帰国後，日本に来たバエレマエケル神父から，ラウル・レヴィカンが結核で重体だということをきいた．

見習医官ファンの夢

ポストに帰ってから，ファンは夜おそくまで，仕事の整理をしていた．すでに発電機もとまり，ガランとした通信室の机にロウソクがともっているだけ．ファンはタイプを打ち，ぼくは横で，日記をつけていた．

かれに，空軍ポストのことを少しきいてみた．

空軍ポストの勤務には，すべて空軍下士官級の者が志願してなる．任期は最低1年だが，「1年でじゅう分さ」とファン．というかれも，すでに1年以上，勤務している．へき地のため，給料が普通の軍務よりいいにもかかわらず，志願者は常に不足している．

1年中ふり続く雨．低く雨雲のたれこめた陰うつな日々．寒い冬．釣りとラジオぐらいしかなぐさみのない生活．島の奥へも，海へも足を伸ばすことの困難な地理的環境．家族との長い別離．手紙も，たまにしか運ばれない．……志願の少ないわけだ．

仕事がたまっているとみえるファンはやや忙しそうだ．かれだけ，ぼくたちは名前で呼んでいた．かれはまだ30そこそこで，しかも小柄なため，ぼくたちと同じ年頃に見えるからだ．陽気なかれは，いつも冗談をとばしている．ぼくたちの日本語の会話に，彼の名や「プラクティカンテ」という語が出るのをすばやくききとると，「コモコモ？(何やて？)」と言って耳に手をあて，「ああ，わかったぞ．悪いやつめ！」と笑う．わかるはずはないのだが，ぼくたちはいつも，弁解に苦労していた．かれはまた，非常に好奇心が強く，時々作ったぼくたちの日本料理(といっても，カレーライスややきめし，味噌汁の類ばかりだが)がすっかり気に入り，ま新しい大学ノートを持ってきて，作り方を教えてくれという．表紙には「日本料理のいろいろとその作り方」と仰々しく書きこむ．仕方なく，ぼくや寺本副隊長が何日か，料理教室の即成講師になった．しかし，ぼくたちの料理をわずかに「日本」料理にしているところの醤油や味噌は，チリにはない．

「なに，かまうもんか．他ので代用するさ．」

果して，かれは今頃，どんな「日本料理」を作っていることだろうか．

かれらは空軍軍人でありながら，制服を時々着ていることをのぞけば，軍人だと感じることはまったくなかった．通常の軍隊らしからぬ勤務もさることながら，「軍人かたぎ」などというのも無縁な人たちである．所長はいるが，上下関係というものではない．単なる役目上のかた書きにすぎない．ポストの内部を見ても，軍隊の出張所だと感じるものは何もない．いや，2階の板間の壁に，銃が2〜3丁かけてはあった．がそれも，ほこりをかぶり，単なる飾りにすぎなかった．

同じようなことは，プエルト・エデンまで便乗した軍艦「アギラ」上でも感じていた．軍人，兵士の大部分は，ほんの少数の士官を除けば，単に，給料をもらう役人にすぎない．チリのように，実際に武力侵略を行っている，あるいは，行おうとしている帝国主義国でもなく，その直接侵略を受けて，防衛についている国でもない国では，本質的に軍隊など不要なのだろう．こじつけにしろ，

ほんとうの意味にしろ，「正義のために，お国のために」という理念は反古同然だ．

ファンに，将来の夢をきいた．

「ぼくは今年の12月で，ここは終りさ．でも2年も勤めてたんだぜ．その次は，南極の基地に行くんだ．やっぱり給料がいいもんな．それが済んだら，今度はサンチャゴに移って，近郊に家を建てるんだ．ヴィーニャ・デル・マル(サンチャゴから近い風光明媚な観光地で，閑静な住宅地でもある)なんかに建てられたらいいけどな．そして，もう1度3年間の短期大学にいって，麻酔医の資格をとって，独立するんだ．制服なんてもうごめんだよ．」

珍しくファンの口調はまじめになり，目は輝いていた．

大学が，事実上，少数のエリートにしか開放されていないチリにとって，軍隊は，エリート以外の人たちに技術や学問を身につけるひとつのコースを提供している．しかし，マイ・ホームを作り，専門家になるために，ファンは地の果てパタゴニアや南極にまで行って働かねばならない．このコースも，相当遠まわりで，困難なことを示している．

別れ

3月7日．

「オーイ．ジャスナリ*1(安成)，いつまで寝てんだ！　船が来てるぞーっ！」

ファンのドアをドンドンたたく音に起こされる．「ナバリノ」号は，すでにエデンの入江に入っていた．入江のまわりから，船めがけて，続々とボートが漕ぎ出ていく．どうせ，船は3〜4時間は停泊しているのにと思うが，「早く早く！」とファンはせかす．朝食もそこそこに，すべての荷物をまとめて，ボートに乗り込む．ほとんどの装備はすでに，伊藤らが持ち帰っており，ぼくたちは各自，キスリングザックひとつずつで，身軽だ．空軍の3人も，ゴンザレス先生夫妻も，ポストに住んでいた人全員，「ナバリノ」号に向かう．ゴンザレス夫妻は，子供たちの待つピトロフケンという町に帰る．「アギラ」号に乗りそこねて泣いていたベルタ夫人も，今日はうれしそうだ．

夜中に寒冷前線が通過したらしく，付近の山々の中腹以上は，うっすらと新雪に覆われている．夏ももう，おしまいか．「ナバリノ」号も，あと1カ月もすれば，冬休みに入る．冬の半年間，プエルト・エデンは，ポストの無電以外，まったく外との連絡を絶たれてしまう．

「ナバリノ」号の周囲は，漁師やアラカルーフのボートがびっしりと取り囲み，船の上と下で，活気のある声がみなぎる．もうすっかり見なれた風景だ．

漁師たちの顔は生き生きしている．小さなボートで漕ぎ回り，放浪の旅を続けながらえた収穫が，今日売りに出される．生活は貧しくとも，退廃や倦怠とは無縁の人たちだ．荒涼として，人を寄せつけぬようなチリ・パタゴニアにおいても，充実した人間の「生」がある．日本では予期もしなかった，ひとつの発見だった．

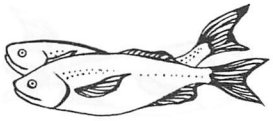
ボートからボートへと乗りわたり，やっとデッキに取りついて，甲板に上がると，乗客や漁師，アラカルーフでごった返していた．

船客にチョルガのくん製を売る漁師，フンコという木で作ったカゴを売るアラカルーフの女，プンタ・アレナスから帰ってきた家族との再会を喜ぶ男，その間をうろうろと，物珍しげに動き回る船客，……．その中には，知った顔も多い．会う人ごとに別れのあいさつをする．

よく川の渡しをしてくれたヴァルデラおじさん，野菜作りのベレー帽の大男，漁船「モロッコ」号の船長アルペルト氏，ミス・アラカルーフのフリアナ．……．

休暇から帰ってきたトロー所長と，炊事係のマテオもいた．トロー氏は，相かわらず，にこやかな笑顔で，ことば少なく，ぼくたちと握手する．彼も，あとひと月で4年間の勤務を終え，プンタ・アレナスに帰っていく．同乗していた後任の所長に任務をひき継ぐために来たのだ．長いへき地勤務は，彼にさまざまな思い出を残したであろう．その中には，どやどやと多くの日本人が押し

*1 チリスペイン語ではyaはしばしばjaの発音になまっている．



かけてきて，しばらく生活を共にした奇妙な思い出も含まれているに違いない．

まったく久しぶりに，空軍のスタッフが勢ぞろいした船上で，ぼくたちも含めて記念撮影をする．

いよいよ，お別れだ．ポストの人たちは，いつになく堅い表情になって，強く握手する．「アスタ・ラ・ビスタ(また会う日まで)．」

ボートが，1隻，また1隻と，「ナバリノ」号のまわりから離れていく．最後にポストの人たちのボートが去っていく．ファンやゲレロ氏が，笑いながら何やらこちらに向かって叫ぶ．

エンジンの始動が甲板に響き，「ナバリノ」号は，プエルト・エデンの入江をあっという間に出，メシエル水道に入る．ポストの高いアンテナだけが，いつまでも目立って見えている．

今度帰ってきた時は，……と，フッと思ってしまう．また来れるかどうかもわからないのに．なんの抵抗もなく．

パタゴニアとは，そんなところだ．

……

ここでわたしはわかれをつげて
ふるさとの家へかえっていく
わたしの夢のかずかずが
わたしのかえりを待っている
わたしはあれはてたパタゴニアへかえってゆく，
吹きすさぶ風が牛小屋の戸をたたき，
波間では流氷がぶつかりあう
パタゴニアへかえってゆく．
……

パブロ・ネルーダ*2「きこりよ　めざめよ」より．

(おわり)

*2　チリを代表する詩人(1904〜73)．1971年ノーベル文学賞受賞．「きこりよめざめよ」は彼の代表的な詩のひとつ(ネルーダ詩集，羽出庭梟訳，飯塚書店(1969)より)．

図3——私たちが調査した南パタゴニア氷床のチリ側に流出するHPS10氷河．手前は湖で，流氷が常に浮いている．チリ・パタゴニアは天気が悪く，私たちの滞在3カ月中，完全に晴れたのは3日間だけだった．ほとんど毎日，暗い雲がかかり，雨が降り，そして時折晴れ間が見える日々が続いた．この写真のように，虹が氷河の上にかかることもあった．